

●日 時 平成26年10月8日（水）午後2時00分～午後4時30分

●場 所 生涯学習センター203集会室

●参加者 （敬称略）

【ビジョン懇談会委員】

- ・加藤武志（会長）
- ・岸田真代
- ・林 尚史
- ・加藤慎康

【加茂郡定住自立圏担当者】

- ・坂祝町 総務課企画係 野村浩貴
- ・富加町 総務課企画グループ 亀山和彦
- ・川辺町 企画まちづくり課 馬場 誠
- ・七宗町 企画財政課情報統計係 塚本 誠
- ・八百津町 総務課政策調整係 奥村芳弘、大澤さち
- ・白川町 企画課企画係 藤井充宏、白川町観光協会 大岩裕樹
- ・東白川村 総務課行政係 桂川憲生、地域振興係 今井 稔

【美濃加茂市】

- ・総合戦略室長 伊藤誠一
- ・市民協働部長 渡辺久登
- ・地域振興課長兼定住自立圏推進室長 大畑英樹
- ・定住自立圏推進室 安田智洋、伊藤浩申、川上明里

- 議 題
1. 開会あいさつ
 2. 提案事業の改善報告（9月24日以降の対応状況）
 3. 第2次共生ビジョン掲載事業の内定
 4. 今後のお知らせ

【会議録（発言は要約です）】

定住自立圏推進室長（開会）

本日は、9月24日に開催した第3回ビジョン懇談会で行った各提案事業の意見交換に対して、その後の改善点を報告する会です。報告内容について、ビジョン懇談会委員の皆さまと意見を交わし、提案事業を内定します。

市民協働部長（あいさつ）

第2次共生ビジョンは、現行のものとは比べて大幅にビジョン策定方法を変更しています。先日の第3回会議では、ビジョン懇談会委員の皆さまから多くの意見をいただきました。本日の会議は、さらに提案事業を効率的にブラッシュアップできるように進めたいと思いますので、よろしくお願いします。

加藤武志委員（会長あいさつ）

前回のビジョン懇談会で、すべての事業に対してコアな質疑応答ができたわけではありません。しかし、委員同士で担当したグループの様子を話し合う中で、別グループにも面白いと感じる提案事業がありました。

本日は、私たちの意見がどのように反映され、工夫されたのか、話を聞きたいと思っています。意義ある時間となりますよう、意見交換をしましょう。

【坂祝町】《みんなで子育て応援事業（子育て環境整備事業）》

坂祝町

先日のビジョン懇談会では、人材育成は圏域内の人だけで考えるのではなく、名古屋圏を含めた広い視野で、多様な考えを取り入れてほしいというアドバイスをいただきました。そのご意見を受け、どんな子どもを育てるのか、どんな支援を行うのかという方針を定め、他自治体の事例を参考に事業を進めたいと考えています。

また、小学校・中学校が1校ずつというメリットを生かした、つながりのある支援があるとよいとの意見をいただきました。このご意見については、まだ具体的に何も決まっていますが、この強みを活かした支援を展開していく方針です。

岸田真代委員

「どんな子どもを育てるのか、どんな支援を行うのかという方針を定め」とありますが、どんな基準で定めているのか不明です。

具体的な内容が不明ですので、具体的に申し上げる事はできませんが、圏域外の人から意見を貰うということにしても、どんな風に取り入れようとしているのかが、もう少し見えてくると良いと思います。

総合戦略室長

先日の会議で、「ワクワクする事業」というフレーズが心に残っています。これらの事業を全国に発信した時、例えば北海道住民がこの事業を知って面白いと感じるかどうかだと思います。2週間という短い期間での完璧な改善は難しいですが、名称やキャッチフレーズの変更など、ワクワク感を出した改善をしていただきたい。

岸田真代委員

自分たちだけで考えるのではなく、ワークショップを開いて様々な立場の人々と意見を出し合い、皆さんと一緒に「ワクワク感」を作り上げていくのが良いと思います。自分たちだけの意見交換だけでは、今までの枠の中だけの意見しか出てきません。やり方自体を、新しい方法にしていくことが必要だと思います。

事務局

本日の会は、事業ごとに改善点を報告し、事業の取り組み方や巻き込み方など、前回に出てきたキーワードの意味を、改めてビジョン懇談会委員の皆さまからアドバイスいただければと思います。

岸田眞代委員

これまでと同じやり方では面白い企画が出来ないと、先日の会でもアドバイスしました。やり方を変えていくことを心掛けておかなければならないと思います。

加藤武志委員

本日は、直接の担当者ではない人もいるので、今すぐ返答出来る部分と出来ない部分があると思います。私たちの意見をすべて聞き入れるのではなく、活かせる部分だけ活かしていただければいいのです。思いがあっても、文言上だけでは伝わってきません。その部分を意識して、各方面と話のやりとりをしていただければと思います。

林 尚史委員

間違っているとしても良いので、どんな団体から人を招くことを考えているとか、人を招くためのスキームを考えているなど、具体的な内容を教えていただかなければ、抽象的すぎて我々も返答に困ります。

直接の担当者ではないとはいえ、自分の言葉で話せないのであれば、チーム内でビジョンを共有していない状況にあると思います。

加藤武志委員

私もそう思います。物事が決定していなくとも、このようなアプローチを考えているなど、仮説や予定でも構わないので、具体的にお話し下さい。

【富加町】《おんさいEXPO事業》

富加町

先日の懇談会でご指摘を受けて心に残っているのは、名古屋と同じことを行っても意味がないと言われたことでした。富加町で開催するという特性を生かした独自性のあるもの、工夫や仕掛けを検討しなければと思いました。

半布里（はぶり）の活動は10年を迎え、小中学校の運動会の演舞に使用されるまでに至りました。この鳴子踊りを地域とともに名古屋圏に向けて発信したいのですが、それだけに留まらない何らかの工夫が必要だと感じています。半布里を中心とした実行委員会や、地域の団体に参加してもらう中で何らかの策を検討していきます。

【富加町】《「織田信長の東美濃攻略」を活用した歴史PRマンガ作成事業》

富加町

漫画のインパクトや漫画製作の目的が教育なのか観光なのか、普及するための仕掛けについて、アドバイスをいただきました。

先日の懇談会でのご指摘どおり、史実のPR不足は否めません。そこで、町民の教育に視点・軸足を置き、PRをしていこうと思います。単に史実を表すだけではなく、史実と脚色による面白みのバランスを取りたいと考えています。

また、事業年数は3年間を予定していますが、マンガ製作後は、関わりのある山城をめぐるツアーなどを、旅行会社と協力して開催できたら良いと思っています。

林 尚史委員

「おんさいEXPO事業」の報告にあった、地域の独自性は、どのように作るのでしょうか。

富加町

名古屋の二番煎じでは良くないと思っています。半布里は、10年間活動して来て、全国に名を知られるまでに至りましたが、町民は半布里のことを、地域で活動する1団体という認識しかしていません。ですので、半布里には『富加町の元気』を表現していただき、地域の人にもっと親しんでもらえるような内容を検討しています。この事業は、地元の人が熟知して、企画段階から一緒に楽しめる内容でなければならないと思っています。

方向性として、圏域外の人を呼び込むことは大前提ですが、それ以前に地域の人と一緒に活動できないのは、良くないので、町の人を巻き込むようにしたいと考えています。

林 尚史委員

地域を巻き込む施策と、外部から呼び込む施策は方向が違います。例えば、地域の一部の人が盛り上がらないようにするために、このような仕組みを作るとか、圏域外に対して独自性のあるこんな施策を打つなど、具体的に進めて行かないといけないと思います。

正直なところ、問題が混在していて、情報整理が出来ていないように感じます。

岸田真代委員

実行委員会は、地域の人を巻き込んだ委員会ですね。それ以前の原案の時点で、どんな企画でどんな内容にするかを話し合うメンバーの中に、地域の人が居るのでしょうか。原案の時点から地域の人を巻き込んでいかなければ、自分たちのものになっていかないと思います。その部分の仕組みや方法を考慮する必要があります。

加藤慎康 委員

この事業は、良い言い方をすれば半布里が頑張り、悪い言い方をすれば、『日本ど真ん中祭り』のスキームをそのまま持ってくるだけなのではないかと思います。この提案書の内容を読み解く限りでは、踊りを踊る人だけが踊って帰って行くだけの姿が見えてきます。

イベントを楽しんでいる人たちはそれでいいのかもしれませんが、周りの人がどんな様子であるのかということ、常に考えて変えていかなければいけないと思います。もてなす側がどんなもてなし方をするかによって、またこの場所に来たいと思うのか、踊って帰るだけになるのかに分かれてしまいます。

どまつりの雰囲気は苦手で、自分が楽しめないからという理由で、どまつりの開催期間中、名古屋を出ていく人がいます。しかし、最近のどまつり会場へ向かう人々の姿を見て、その意識が見直されているようです。電車に乗る人々のマナーの良さを目の当たりにし、雰囲気が改善されたと感じているようです。それはきっと、参加側と傍観側のずれが解消してきているのだと思います。

町としてどうかということ、運営面や鳴子踊りを含めて富加町の地域らしさを出せるかが、重要だと思っています。

総合戦略室長

1つ目に、半布里はこの企画に関して、どのような関わり方をしているのですか？ 例えば、半布里は地元以外のチームと交流する機会が多くあると思います。半布里のメンバーが名古屋では出来ない企

画、半布里のメンバーが富加町で開催したいと思っている企画について、どう考えていますか？

2つ目に、どまつりや鳴子踊りに興味のない人に対して、どんなメッセージ性を持っていますか？ どまつりに絡めたメッセージがあると参加者が増えると思います。この事業が地域にとってどんな意味を持つのか、半布里側はどう考えているのでしょうか？

富加町

半布里は現在、100名ほどのメンバーが居ます。半数は地元住民ですが、半数は京都や関西などの地域外のメンバーで、毎週踊りを練習しに富加町へ来ています。地域外から来ているメンバーは、半布里の活動に魅力を感じている人たちです。半布里も10年という活動年数を数え、世代交代し始めています。その中で、若い力で地域の「元気」を発信したいという思いで、現在活動しています。

地域外の大会で活動の成果もあがり、自分たちの大会を開催したいと考えている若い人たちが出はじめたことで、今回の提案が挙がってきました。

市民協働部長

私も以前、鳴子踊り大会のイベントを手伝っていました。しかし、踊り手だけが楽しんでいて、周りとの温度差を体験したことがあります。

半布里は、どまつりで優勝を勝ち取っていないのですね。ならば、徹底的に「優勝」をめざし、地域を巻き込んで応援していくことで、地域の誇りが生まれるのではないのでしょうか。皆が応援し始めると、つられて注目する人も出てくると思いますし、練習する側も楽しくなります。

参加者に技術的なものを必要とするイベントだと、参加者が増えにくい傾向があります。しかしそれを逆手にとって、参加者が優勝目指して練習をし、周りがそれについて誇りを持ってもらう事は大切なことだと思います。地域全体で支援して、町が育っていくと良いと感じました。

林 尚史委員

最近、シビック・プライド（地域に対する誇りや愛着）という単語をよく耳にします。富山県の事例だと、八尾地域の「おわら風の盆」が有名で、この踊りを踊る人は少ないですが、踊らない人はそれを誇りに思い、地域外に発信しています。

目的がどこにあるのが重要で、低予算で大きな成果を上げるのが難しい昨今、住民が誇りを得られることは大きなゴールだと思います。2次的経済効果も期待できるので、この部分ははっきりした方が良いでしょう。

加藤武志委員

いずれにしても、半布里の「思い」が出発点だと思います。

実演家として名を成すことと、イベントをプロデュースすることは、ベクトルが違います。企画に関わるのであれば、自分たちも周りを見渡せる目を持たなければなりません。そもそも、自分たちが楽しければ良いのであれば、公金を使う必要はありません。どんな内容でも許可するのではなく、公益の意味を正確に理解した上で一緒に事業を進めて行くことが、富加町の責務だと思います。

マンガ製作については、作った後の「成果品」をどう生かすのか、気になりました。例えば恵那市の岩村町では、佐藤一斎という儒学者が遺した言葉を日めくりの紙にまとめて全国に発信したら、小学生でもその言葉を言えるようになったという話を聞いたことがあります。

織田信長について、どれだけ富加町の史実に基づいた足跡があるかは把握していませんが、地域向け

なのか地域外向けなのか、どのような目的でマンガを作製したのかを定めなければ、作って終わりに成りかねません。

これは「おんさいEXPO事業」にも言えることで、10年後のビジョンが見えて来ないのです。行き着くビジョンや効果がもう少し伝わってくるような、もう少しアウトプットの部分がはっきりすると良いと感じました。

総合戦略室長

織田信長と言えば、残虐で恐ろしいという一般的なイメージがあります。しかし、その恐ろしいイメージとは違う史実が富加町にあるのならば、それを徹底的に押し試みるのはどうでしょうか。PRできるポイントがあって徹底的に追及すれば、全国に対して大きなインパクトになると思います。

岸田真代委員

地域に根差した分野の研究者が居て、新しいものが生まれてくる様子が見えているのならば面白いのですが、わざわざ作るというのは如何なものでしょうか。

例えば、史実を確かめている最中に有力な古文書が出てきたなら、面白そうですね。そういう史実などを炙り出すような内容のマンガになっているなら、なお面白いと思います。その後、関係のある場所をツアーで回るなどの企画を立てれば、次の展開も考えやすくなります。

加藤慎康委員

愛知県に「からくりBOOKS」というボランティア集団があり、地域の伝承や民話など、地域が大切にしているものを素材に、飛び出す絵本（iPadのアプリケーション）を製作しています。これらの作品のストーリーは芸術系の学生や漫画家志望者に作ってもらい、iPadで閲覧できるようにして、iPadと一緒に保育園などへ提供しています。活動の幅は県内で広がり、「からくりBOOKS」シリーズとして、地域と地域をつないでいるようです。

加藤武志委員

私は歴史関係の団体をよく知っていて、歴史の視点の大切さを感じています。しかし、どんなにマニアックな研究であっても、人に見せることや伝えることが難しい一面があるので、一般の人に伝えられるような切り口を持って発信していかなければ、伝わっていかないと思います。これは史実に限らず、他の要素にも言える事で、どこを切り取るのかが焦点です。

この忙しい時代、『史実に少しだけ関連する品が出土した』という程度の情報では、人の気持ちは動きません。他の誰も知らない信長像が無ければ、普通の人は食いつきません。だから他者にアピールするためには、その部分の磨き上げが重要です。

しかし、先ほどの「からくりBOOKS」のように、使う媒体やメディアへの発信方法によって、普及具合が変わりますから、史実を調べることも伝えていくことも、両面から進めて行くと良いと思います。

【川辺町】《ボート王国プロジェクト事業》

川辺町

主体団体側も、ボート愛好家以外の人をどう巻き込むのかという課題や、指導者・審判などの必要な

人材をどう巻き込むのかという課題を認識しており、試行錯誤しています。

川辺町は、オブザーバーという立場で団体と連携しています。

美濃加茂市や八百津町とどう関わっていくのかという、具体的な提案を団体に求めています、いまだ返答がありません。

加藤武志委員

ボート応援団を結成していく予定なのですか？

川辺町

既に実行に移している段階です。現在、新聞折り込みで、ボートコミュニティの概要や、ボートアカデミーや教室を設立していくことを周知しています。同時に協賛者やボート応援団の団員を募集し、秋に開催される町内の産業祭でブースを設け、そこでもPRすることを予定しています。

先日の懇談会で教えていただいた「尾道（おのみち）にあるサイクリスト用のゲストハウス」の話ですが、正直、私たちの提案事業に活かせるかどうか、難しく感じています。というのも、尾道で活用されている自転車は、生活にも密着した身近な乗り物です。加えて、車に積むことが出来るので持ち運びも便利で、自分一人でサイクリングをはじめることが出来ます。しかし、ボートは高価で、持ち運びも容易ではありません。おまけに川のある所でしか動けないため、身近な存在とは言い難いので、人に振り向いてくれることへ注力することが、とても難しく感じています。

林 尚史委員

定住自立圏の「自立」の部分に置いて、私が最も欠かせない要素だと思うのは、経済効果だと考えています。

前回にも助言しましたが、ボートは狭い世界なので、圏域内だけでボート人口を増やすことには限界があります。だから、世界規模を視野に入れなければ、企画倒れになると思います。

ランドマークとなるものを作ると、メディアが取材にやってきます。そうすると、その情報を見た全国のボート愛好家は現地へ訪れるようになり、愛好家に引っ張られて興味のある人物が現地を訪れます。このような大きな規模を目指す必要があると思います。

確かに周辺地域への投げ込みは重要ですが、外貨を稼ぐことを真剣に考えた方が良いと思います。全国区のブランドにするため、何が必要かを真剣に考える必要があります。

ボートが普及しにくいジャンルであることは、問題ではありません。その情報を知った人が、現地へ行きたくなるような表現（写真やプレゼン等）ができれば、全国から来訪者がやってきます。

富山県の高岡に、中心地から車で30分も行かなければ、辿り着かない写真専門の美術館があります。しかし、その美術館が安藤忠雄氏による建築だという情報をPRすると、メディアやクリエイターをはじめとした多くの人々が来館しました。先日は篠山紀信氏が訪れ、彼に引き寄せられた人々で過去最高の来館数を数えました。

このようにボートの敷居の高さが問題ではなく、このようなレベルを目指し、外に視野を広げて考えていくことが問題なのだと思います。もちろん、地元の協力は必須ですから、そこはこの問題と別の考え方で進めて行くと良いと思います。

加藤武志委員

そもそも、主体団体の関心が、アカデミーという教育機関を作ることに注力しているように感じます。

そのため、地元の人を巻き込むことや、外に向けたPRに関する意識が弱くなっていると思います。

総合戦略室長

今の時代、必要なのは「ナンバーワンになる」というような、大きな夢だと思います。世界一の「ポート王国」を目指せば、応援してくれる人々も増えていくと思います。

林 尚史委員

主体となる委員や設置機関は、一定数必要だと思います。しかし、最低限にとどめ、圏域外の理解を求める前に、外の視点を学びに行った方が良いと思います。それには、「趣味の強さ」を活かすのが良いと考えます。

石川県白山市で、ラリーのイベントが開催され、2,000人が参加しました。そのうち、8割が県外から訪れ、ダカールラリーの選手である片山右京氏も参加しました。このように、趣味や興味のあることならば、世界的に有名な選手であったとしても、著名人は招待に応じ、かつ、格安で引き受けてくれることもあります。

地元の人には外側の意見や評価に弱いところがあります。著名な人物が情報を発信することで、地元の理解も得やすくなります。

実作業は地域内のコアな人材で固め、海外でも通用する強力な発信者を戦略的に引き込んでいけば、あとは周りが付いてきてくれると思います。

岸田真代委員

プレゼンで発表した主体団体の人々のように、強い想いをを持った人が地域に居ることは、その地域の強みだと思います。

加藤慎康委員

川辺町総出で団体を応援していく動きは大切だと思います。職員全員が同じ缶バッジをつけたり、ポートの講習を受けた人にステッカーを配布するといった様子ならば、きっと訪れる人も楽しいと思います。今の話を聞いただけでも、すぐにツアーが組めそうな気がします。

加藤武志委員

行政的には、一つ一つをクリアしてから次に取り掛かりたいところだと思いますが、市民側だからこそ、気持ちやスピード感があると思うので、ある程度はゆだねることも必要なのではないかと思います。ただし、丸投げをせず、団体とのやりとりを大切にしていきたいと思います。

【七宗町】《交流の場の提供とレッキーマラソンコース沿いの環境整備事業》

七宗町

ビジョン懇談会委員より、若い世代が居ないことについて指摘をいただきましたが、これは団体側も認識しており、自分たちだけでなく地域を巻き込んで進めていきたいとの意向を確認しました。

【七宗町】《「龍神さんが棲む箱庭のまち」まちづくり事業》

七宗町

事業が多すぎるため、絞った方が良くのご意見をいただきました。団体側の目的は地域の暮らしやすさの向上ですので、「お助け部会」を重点的に実施し、外から人を招くために特産品などの開発を行っていく予定です。加えて、人員不足ではないかのご意見をいただいていたのですが、この団体には下部組織があるので、多くの取り組みを分担して実行したいです。

【七宗町】《でか金を媒体にした地域づくり事業》

七宗町

前回の会で、飼育目標数について答えることができませんでした。団体と話し合う中で、品評会などの規模を考えながら、飼育者数と、飼育者のフォローを行い、具体的な目標を持って進めて行くとの方針を確認しました。

総合戦略室長

3つの事業に、共通した項目があると面白いと思います。せっかく3つもあるのだから、バラバラな状態ではもったいないと思います。

七宗町

実は、今は3つの事業ですが、将来的に1つにまとめていく構想があります。主となるのは『龍神さんが棲む箱庭のまち』まちづくり事業の主体団体で、およそ10年間で1つにまとめていくことを考えています。

加藤武志委員

地域の担い手という感じを受けました。良い方向ですが、同じ七宗町なのにバラバラな感じを受けません。

林 尚史委員

ビジネス的でなくても、情報を知った人がワクワクしたり、夢を持つような内容でなければ、続けていくことは難しいと思います。でか金が世界的にどのくらいレアなジャンルなのか分かりませんが、このような取り組みは面白ければ国境を超えたいと思います。

加藤慎康委員

何を大事にしているのかが伝わってくると、それを大事にしたい、守りたいというファンが増える例もあります。

七宗町

実は、でか金は七宗町で卵をふ化させたことで、七宗ブランドにすることができました。販売することが目的ではありませんが、来年あたりから公表していく予定です。

加藤慎康委員

七宗町の素朴さが伝わるような表現ができると良いと思います。この地域には、人々を惹きつけるものがあると思います。

【八百津町】《野外フェスティバルからはじまる新しい地域コミュニティ事業》

八百津町

前回の懇談会では、イベントのクオリティやブランドイメージ、美濃加茂市との連携についてアドバイスをいただき、主体団体と2度打ち合わせをしました。

イベントの他にもカヌーを体験できるなど、自然を活かしつつ一日をかけて野外フェスティバルが開催出来ないかという意見や、昭和村内で「おんさいEXPO事業」や「里山アートプロジェクト事業」などと一緒に開催出来ないか、などの意見も出ました。

加藤武志委員

先日の懇談会では、主体団体の方から、他の事業と連携したいと発言されていました。実際にどんな事業とでも連携出来そうな内容だと思います。

シャトルバスがフェスティバル会場だけを結ぶのではない点について、団体側は納得しているのですか？

八百津町

話し合いの中で、美濃加茂市内で3～5か所の会場を設営しながら、市の観光名所を回る企画を5年間でやり、音楽フェスティバルだけではなく圏域全体を巻き込んでバスを回すようになると面白いのではないかと、という意見が出ました。話が大きくなりすぎることへの問題はありますが、定住や移住に関わるブースをイベント内に作る話もありました。

加藤慎康委員

予算では、アーティストへの報償費が多く取ってありますが、ストーリー性を持たせると参加者の集め方が変わってくると思います。単純に大物アーティストを招くだけでは、この地域だからこそ訪れてくる人が集まらず、アーティスト目当ての人ばかりが来てしまいます。この地域だからこそ出来ることや、アーティストもこの地域のファンになるような企画を考えることが有効だと思います。アーティストへの報償費を縮小するのではなく、イベントを開催する側が「このアーティストを呼べて楽しい」と思えるような内容を、前面に出して進めていくと良いと思いました。

また、主体者は名古屋から来ているので、もっと都市圏住民の目線に沿うようなアイデアが出るのではないかと思います。

八百津町

イベントは、3,000人規模を予定しています。アーティストは多種多様にいますが、この予算で有名なアーティストを呼べるのか不安があります。主体団体は、過去に小規模のイベントを開催しており、その繋がりですべてアーティストを呼ぶ予定ですので、このイベントだからこそ招きに応じてくれるという関係を、損なわないようにしていくことの大切さも話し合いました。

総合戦略室長

せっかくの野外フェスティバルなので、この地域で開催するからこそその特色があると良いと思いました。

岸田真代委員

企画や場所に、八百津町らしい要素は含まれていますか？ 具体的なイメージを描いている場所はあるのでしょうか？ 例えば先日、私はイタリアの野外オペラを体験しました。その場所で開催するからこそその魅力を実感しましたので、この事業も「八百津町らしさ」を出していくと、素晴らしい内容になると思います。

八百津町

具体的なイメージの湧く場所は、すぐに思い浮かびませんが、この事業を継続した先に、そのような場所が出来るように進めて行きたいと考えています。

林 尚史委員

作っていく過程を工夫すると良いと思います。名古屋の人が関わっているので、都市圏の若者のネットワークを持っていると思います。定住につなげるということは、来訪者にその地域の人に会いたいという気持ちを持ってもらうということでもあります。このイベントを通して、都市圏住民と地元住民が親しい間柄になれるかが、成功の鍵だと思います。

【白川町】《名古屋市民をみのかも定住自立圏へ招くツアー事業》

白川町（観光協会関係者）

前回の懇談会で、ツアーだけで終わることが無いように旅先案内人を位置付け、町内のNPO団体などと協力して体験型のツアーにしていくことで、来訪者と地元のつながりを深めていくことが良いとの意見をいただきました。最終的にこの地域に定住していただくことを目標にして、ツアー内容の検討を11月頃から進めて行く予定です。

白川町（定住担当者）

新規就農者として都会から移住した人や、猟師と知り合って猟の魅力にはまり、ついに猟銃免許まで習得して、獲れた肉を名古屋の友人と分け合うような生活をしている移住者の様子を、初めて知りました。そのことは、白川町に住む人の大半も、知らないことだと思います。このように、町の魅力を知っている移住者の意見を聞きながら、事業を進めている状態です。

加藤武志委員

前回のビジョン懇談会では、圏域中に存在する様々な魅力を、臨機応変に来訪者へ提供できるプロにならなければならないという話をしました。地域の宝物探しを行うことは悪いことでは無いのですが、その宝物を組み立ててツアーにしていく過程が気になります。住民の話を聞いてツアーを企画することや、網羅的に提案された意見を反映するだけでは成功しません。情報や意見の取捨選択を誰が行うのが焦点となります。単なる話し合いで終わるのではなく、実際の商品にしていくプロセスを見据えなければ、単純に公金を使用して終了と成りかねません。

私の経験上ですが、観光協会は取捨選択部分がやや不得意だと思うので、中心となるブレインや若者を取り込み、チームの方向性をどのようにしていくのが、この事業の成否を分けると思います。この事業は他の市町村からの期待度も高く、実施しても効果が無いようでは宝の持ち腐れになってしまいます。今の状態では、「この圏域の魅力で、都会の人を絶対にノックアウトさせるのだ」という本気が見え

ません。

林 尚史委員

やり方次第で膨らむ事業だと思います。ツアー内容を企画すればいいという訳でなく、その上で、相手の興味に合わせてベストなプレゼンテーションが出来るかがポイントです。定住者が増えることを最終目的としているのですから、ツアーで訪れた先の関係者を集めて夜に飲み会をするような、ツアー参加者と地元住民の間に人間関係が残るような仕組みを作ると良いと考えます。

定住してもらうことを目的とするならば、とても効果の高い取り組みですので、ぜひ色々な人の意見を聞いて進めて行くと良いと思います。

岸田真代委員

改善報告の中に「町内のNPO団体と協力して」とありますが、町内だけにとどまらず、圏域の内外を含めて取り組んだ方が、より定住に結びつくと思います。

加藤慎康委員

私の同僚が、とある場所の地域おこし隊員になり、その後一気にその町の名前が全国に広まりました。このようにコーディネートする人物が重要な鍵を持っています。面白い企画ならば広告代理店やNPO関係者が魅かれやすいので、協力してもらえる「つなぎ屋」のような人物を獲得できると良いと感じました。

林 尚史委員

その中に圏域外の目線を入れた方が良いと考えます。自分たちで感じている自分たちの印象と、外部から見た客観的な印象は、時に真逆なことがあるからです。この部分は地元の意見だけでは出来ないことなので、外部の目線を持つ人物を取り込むべきだと思います。

【東白川村】《R41カード事業》

東白川村

前回の懇談会にて、カードのビジュアルをインパクトあるデザインになるようにしたり、委託先を村内事業所ではなく外部にするなどの工夫があると良いとの意見をいただきました。このアドバイスを受けて、外部の広告代理店に委託することを検討しています。

林 尚史委員

外部委託をすることに異存はありませんが、気を付けるべき点は任せきりにしてしまうことです。外のアイデアを借りることは問題ではありませんが、発注側に、そのアイデアが内外の視点を持った適正なものかどうか、判断できる目利きの人材が必要です。

加藤武志委員

委託は、発注する側のグレードに見合ったものしか出てこないという性質があります。それゆえ、払った金額に見合わない完成品が出てくる可能性もあります。大切なのは発注側が最終的なゴールを目指していないことで、リソースを示していなかったり、基準を定めておかなければ、委任したと言えませ

ん。すべてを一括にプロポーザルするのではなく、発注側で最初の要綱や審査の基準、カードのデザインや使われ方などを明確に定めてから、プロポーザルに掛けた方が良いと思います。

【美濃加茂市】《里山アートプロジェクト事業》

クオリティを高めるため、全国的に人気のある著名人を招く予定です。また、アートの展示は昭和村内に留まらず、圏域市町村にサブ会場などを設け、作品設置場所を広げていく予定で進んでいます。加えて、「里山アート」という名称に特色を持たせるため、当初から企画を予定していたサブタイトル（やまびこが聞こえるなど）を事業名に取り込み、サブタイトルを前面に出してPRをしていくようにします。

【美濃加茂市】《K i s o ジオパークにぎわい創出事業》

前回の懇談会では、スキームだけではなく関係者の熱意が大切だとして指摘を受け、当事業関係団体との意思確認が改めて重要だと感じました。委託先の見通しだけでなく、実際に関わる人たちの気持ちを盛り上げる場作りをして盛り上げた上で、熱意を活かせるマネジメントチームを作りたいと考えています。

【美濃加茂市】《里山再生プロジェクト事業》

森林文化アカデミーで加工した製品を東京でPRすることや、破碎した竹の再生利用を岐阜大学に行ってもらうことで、信用のある製品として企業に働きかけるなどを予定しています。

また、限られた時間内での提出だったため、提案事業書に記載しきれないところがありました。50年後の里山作りを見据え、苗木を植えていく大切さを市民にPRして巻き込むことを盛り込んでいきたいと考えています。

【美濃加茂市】《地域情報放送事業》

災害時に放送を聞いてもらう為の方策や、誰に対しての放送なのかという目的についてご意見をいただきました。月に1度、災害訓練放送を実施することや、企画の段階から市民に関わってもらうことで、市民が面白いと感じる放送となるよう番組を制作します。面白ければ聞いてもらえるので、日常的に聞いてもらう事で非常時に対応できるようにしていきたいと考えています。

【美濃加茂市】《生物多様性地域連携促進事業》

前回の懇談会では、調査を定住にまでつなげる方策や、具体的な内容が伴わなければ市民にとって実感が湧かないのではないか、との意見をいただきました。

イメージだけでなく調査によって実際の状態を明確にすることで、身近な生物の保全活動を知ってもらい、自然豊かなこの地域で住むことについて、改めてそのメリットを感じてもらおうと考えています。

【美濃加茂市】《みのかも魅力発信！名古屋交流拠点事業》

モノだけが地域の魅力だと考え、それを中心に集めていく予定でしたが、人物や歴史も地域の資源と捉え、地域の魅力として都市圏に発信していきたいと考えています。

「みのかも魅力発信！名古屋交流拠点事業」について、この事業を発信する場所は、すべての事業の基幹となる場所だと思います。その意味で、この事業と白川町のツアー事業は、連携する事業の成功も失敗も支配できる取り組みとなるでしょう。

この場所のコンシェルジュとなる人物の人材教育は、十分に行うべきだと思います。人数は、教育や産業振興など、ジャンルに分けて複数人いても構いません。

また、この場所に訪れる人々をコミュニティ化し、囲い込みをしていくことが有効だと思います。データベースを取るかは別ですが、その場合は、R41カード事業のカード登録とあわせても良いと思います。

気を付けるべき点は、拠点に訪れた人のイメージが固まってしまうことで、常に開催するイベントに変化を持たせることが重要です。里山アート事業でイベントを開催する予定がある時期は、アートを展示することや、ボート大会が開催される前ならば、ボートに関係する展示をするなど、来場者を飽きさせない工夫が大切だと考えます。

「里山アートプロジェクト事業」について、アートは開かれているジャンルですが、人を選びます。誰に対して発信しているのか、圏域のブランドイメージを上げるために、トップクラスの戦略を練った方が良いと思います。例えば、若者が集まり易いおしゃれな店舗にフライヤーを置き、名古屋で最も感性の高い人物や発信力の高い人物を対象に情報を発信し、取り込んでいくなど、誰に向けてどこに情報を発信していくのか考えていくと良いと思います。

アートはその場所に配置するだけで成立してしまうため、配置場所が鍵となります。美濃加茂市だけでなく圏域全体に広げていくと、中長期に渡って意味のあるブランド発信が出来ると思います。

加藤慎康委員

「Kisoジオパークにぎわい創出事業」の取り組みは大切だと思います。しかし、名称とは違う内容を実施してしまっているのは本末転倒です。例えば堤防の欄干の色一つを取っても、その色について良し悪しの両方の意見があると思います。アート分野に強い人物や若者、女性など、情報を発信する相手がどんなどころに魅かれるのかが、かなり大事なポイントだと思います。

加えてビジュアル面も大切で、地域として、その取り組みを押し上げるような形に連携出来れば良いと思いました。

岸田眞代委員

正直なところ、美濃加茂市で提案される事業は、インパクトが弱いと感じました。なぜならば、これらの事業は定番の事業であり、既存の事業をそのまま持ってきたように感じてしまうからです。もう少し工夫があれば良いと思いました。

加藤武志委員

名古屋交流拠点事業は、すべての鍵となると思います。地域情報放送事業も方法を工夫して行けば様々な情報を発信できるチャンスとなります。圏域をつなぐ意味で重要です。

すべての事業に共通する点は、キーパーソンの存在です。主体となる団体の代表者の気持ちが大きいと、事業に対して期待が出来ます。しかし、それだけでは不十分で、主体となる組織の中に鍵となるコーディネーターやコンシェルジュなどの「つなぎ役」が誰なのかが重要です。どれだけ良い意見を反映し重要な人物を巻き込んでも、明確な目的を見据えてそれらの資源リソースを適切に采配できる人物がい

なければ、事業が頓挫してしまうこともあります。

そしてどの事業に対しても言えるのですが、各団体や関係者、圏域内外の顧客との関係を理解した上で、課題の整理や事業の企画を行っているのか気になります。バランスの良し悪しが問題ではなく、宛て職のように、役割に中身が無ければ、スキームや組織図を描いたところで成功するか不明です。

鍵となる人物をいかに巻き込んでいくのか。その判断基準をどのように見つけて作るのか。どのようにパートナーとの関係を作るのが大切だと感じました。

定住自立圏推進室長

前回から二回に渡り、提案事業について意見交換を行ってきましたが、これらの事業を内定してもよろしいでしょうか。

ビジョン懇談会委員（出席者全員）

内定に異存はありません。

定住自立圏推進室長

それでは、市町村の合意によって実施が決定している「休日急患診療事業【病診連携】」と「みのかもつながる力創造事業」を含めて、別紙の事業を内定とさせていただきます。

平成28年度以降の事業費や内容については、毎年見直しを行います。従って、ビジョン懇談会を通じて、事業内容を変更していく手続きを毎年行います。

今後は各市町村内で予算要求を行い、詳細な予算を編成してまいります。次回のビジョン懇談会では、各市町村事業の内容を踏まえてご報告いたします。また、国に提出するための共生ビジョンの冊子案について、ビジョン懇談会委員の皆さまに審議をしていただく予定です。

(終了)